

勤勉に働く

人とは、社会を形成し社会に生きる生き物である。渋沢栄一は社会に生きる人間について、「人は生まれ落ちてから死ぬまで、社会の一員として、重き責任を負わなければならない。その責任とは他事にあらず「働」の一事である」（『渋沢栄一訓言集』 p 59）と述べている。

働くことは人が本来的に具えている性質である。それは、我が身の五欲（注）を満たす欲望のためではない。「働くとは傍（ハタ）を楽（ラク）にすること」と俗言にあるが、傍を楽にするところに真の歓喜が生まれるものである。そもそも人の幸福とは、①人に愛されること、②人に誉められること、③人の役に立つこと、④人に必要とされることの四つであり、②～④は「働く」ことによって得られるものである。

昨今では、個人主義思想の浸透によって自他を切り離して考えるようになった。何でも自分中心に考えるようになり、損得でしか判断できないようになってきた。各自がその一身の利ばかりを計り、「自分さえよければ」とか「他人の目に触れなければ」といった損得勘定のみで判断しても本当の喜びはない。また、自利ばかりにこだわっていると人格と人格の交わりはなく、真の喜びは見いだせない。

それは、結果的に社会の平和や一国の安寧を害^{そこな}うことに繋がるのであるが、何よりも人としての真の喜びが見出せなくなるところに問題がある。人はハタをラクにする働きによって自己実現を図ったり、他人や社会の役に立つことで生きている実感や悦びを味わうのである。個人主義の考え方は自由を謳歌^{おうか}する理想のような錯覚を与えるが、「社会に生きる人間」という本質を蔑ろにしてしまうことに注意しておかねばならない。

働くには勤勉でなければならない。渋沢栄一は、「何事に当たるにも全力を傾注せよ。勤勉精励は、成功の要素である」（『渋沢栄一訓言集』 p 80）と述べている。物質的にハングリーな時代は、勤勉になるための条件は容易であった。富は勤勉と儉約から生まれるからである。

しかし、今日のような豊かな社会になると、勤勉を支える精神を自らの心の内に確立しなければならない。そのためには、楽しく・諦めず・不平を言わずに仕事をするのである。あるいは、「〇〇の為」と他者の存在をはっきりとさせることである。自分の心から自我を取り去り、第一は親のため、家族のため、第二は周囲の人のため、会社のため、第三は国家・社会のため……と、このように考えて各自働き、我が身と家庭をよく治めて生活を営むことである。そうすれば、その心が強靱^{きやうじん}になる。因みに、「〇〇の為」という気持ちは、自分が今在ることへの感謝の念と高恩に報いようとする意志の力から生まれる。

そもそも、人の本分は自分を精一杯出し尽くして生きる場所にある。それは、我が身の欲望のためでもなく、また人目を気にするといった功利的なものでもない。かつては、「お天道様が見ている」と常々親からも周囲からも言われて育てられたものである。それは、陰日向なく勤めることの大切さの訓えであった。陰日向なく勤めることが勤勉であり、他人は評価してくれなくても、自分を超越^{おし}する大きな何かが見守っている、その大きな何かに恥じないように勤めることの大切さの訓えであった。

その訓えは恥の意識を涵養し、献身の貴さを身につけさせた。献身精神に至るまでの勤勉があつてこそ、人の道に至ることが出来るのである。それは自分の居場所、存在意義を明らかにするのみならず、安心立命の境地に入らしめ、調和のとれた人間関係をもたらすのである。

(注) 五種の欲望のこと。五感（眼・耳・鼻・舌・身）の五境（色・声・香・味・触）に対する欲望で感覚的なもの。あるいは、財・色・飲食・名誉・睡眠を求める欲望のこと